

○ 活動報告

会員制情報誌に能登金剛についての記事を執筆

氏名：西島 幸夫 職業：経営コンサルタント（ISO取得支援） 都道府県：東京都

会員制情報誌「たのし」に、いしかわ観光特使の名前で「能登金剛」を紹介しました。

コピーして会合や名刺交換時に手交しPRしています。

掲載された記事はこちらです



[能登金剛文学紀行.pdf](#)  



能登金剛・「ゼロの焦点」の舞台を訪ねて

松本清張文学紀行

いしかわ観光大使 西島幸夫

能登外浦屈指の景観

車窓の左手に晴れた日本海を眺めながら「のど里山海道」を金沢から能登へ向かった。途中で口能登の氣多大社（能登一宮）に参拝した。万葉集にも載っている古代からの神威が偲ばれる社だ。気が高まるパワースポットで、運氣上昇を願うお守り「氣守」を授かることができる。北上して、外浦に面し北前船の風待ち港として賑わっていた福浦の港で一休みした。

福浦よいとこ入船出船 波は黄金の花が咲く

その福浦のすぐ隣に能登金剛・巖門がある。松本清張のミステリー小説の傑作「ゼロの焦点」(昭和34年12月刊)の舞台だ。能登金剛から望む青い海原は秋の陽の光を受けてきらめいていた。この小説によって世に知られ、躍り有名になった。展望台で潮風に吹かれ、波が岩壁を洗う豪壮な景観を望んだ。小説が描く、暗雲垂れこめた黒い海、が嘘のように明るく青かった。遊覧船に乗って巖門の洞窟を遊覧し、海から荒々しい岩が織りなす風景を眺めた。訪ねる前に小説を再読した。夫の謎の失踪に、主人公板根禎子の高まる不安を暗示するように雪の金沢と風雪吹き荒ぶ能

登金剛が描写されている。戦後間もない時代を必死に生きた過去を背負った人たち、が、自分の暗部を知られまいとして殺人を呼び悲劇のストーリーになった。

いつも不機嫌だった練馬時代

私が住む東京練馬の上石神井に、かつて清張さんが住んでいたことを文芸講演会で知った。昭和29年から36年まで練馬区関町と上石神井に居住した。この時期は「点と線」「ゼロの焦点」「天城越え」「砂の器」などの代表作を書いて、流行作家として売れっ子になり、猛烈な忙しさの真っ只中だった。講演した元中央公論社の編集者宮田穂菜さんは、松本清張の担当を30年務めた女性。忙しい清張さんを傍で見た人しかわからない作家の苦惱を語った。昭和28年に芥川賞を受賞して、純文学の道歩も管だったのに、国民的な作家として売れるようになった。いつも不機嫌だったのは、猛烈な忙しさのなかで、純文学の道を志すことができなかった。「苦悶」のせいだという。清張さんは若い頃に赤貧の生活を味わい、汗を流して働く人間の生活と心理を、身を持って知っていた。一日中働かざる人々には純文学は体が受け付けないし、読む管がな

いことがわかっていた。だから、あえて誰でも読めるわかりやすい文章を書く道を選んだのだ。41歳過ぎての遅い作家デビューだったことも相俟って、苦悶しながら国民的作家の道歩むことになったのが練馬時代であるという。

清張さん曰く、

難しい文章を書くことは易しい、易しい文章を書くことは難しい。

能登の海を望んで建つ歌碑

能登から帰り、池袋の新芸芸坐で、昭和36年製作の松竹映画「ゼロの焦点」(監督野村芳太郎)を観る機会があった。重雲が垂れ込めた暗鬱な能登の海がモノクロのスクリーンにうねっていた。戦後の貧しい時代を懸命に生きていた人たちの深い無限の悲しみが胸に迫ってきた。エンドマークに重なって、一条の光が暗い海に射して輝いていた。その光は作者のヒロインたちへの温かい眼差しに感じられた。昭和35年冬に金沢・能登を舞台に約20日間のロケーションをしたという。50年以上前の雪景色の街並みが撮影されていて切ない懐かしさを感じた。冬の能登金剛の荒涼とした風景は、悲劇的なストーリーにふさわしい舞台だったのだろう。巖門の眺めの良い高台に松本清張直筆の歌碑がひっそり建てられていた。「雲たれて ひとりたけれる 荒波をかなしと思へり 能登の初旅」

(一)



荒々しい能登金剛の海岸風景



海より眺めた能登巖門の洞窟



巖門高台より能登の海を望む